立命館地理学　第5号（1993）　87～90

単位制高校における地理教育について

辰　己　　勝*

Ⅰ．はじめに

大阪市は、定時制高等学校の活性化を図るために、昭和63年6月から委員会を設けて、調査・研究を行なった。その一つに市立の定時制高等学校に、単位制による課程、専修コース等を設置することがあった。すでに、文部省は臨時教育審議会第1次答申（昭和60年6月）において、新しいタイプの高等学校（単位制高等学校）の設置を提言しており、63年4月には、学校教育法施行規則（第64条）を一部改正して「単位制高等学校教育規程」を制定した。大阪市も国段階の方針を検討して、具体的に単位制課程をもった高等学校の設置にむけて検討委員会が組織され、平成2年6月に開設準備委員会を発足させ、平成3年4月に開設準備室を設置した。

そうして平成4年4月に開校した大阪市立中央高等学校は、近畿地方で初めて「単位制による課程と現行の学年制課程（定時制）」をもつ新しいタイプの高等学校となった[1]。

この学校の教育理念は、社会の変化に主体的に対応し、社会の発展に貢献できる豊かな人間の育成をめざすことである。そのために基礎・基本を重視するとともに、生徒ひとりひとりの生活や目標に対応できるような単位制独自の学習システムを取り入れているのが大きな特色となっている。

* 大阪市立中央高等学校（立命館大学非常勤講師）

Ⅱ．単位制課程の特色（大阪市立中央高等学校の場合）

1）学校の形態はⅠ部（午前10時40分開始）、Ⅱ部（午後1時開始）、Ⅲ部（午後5時30分開始）があり、それぞれの優先時間帯をもとに1日10校時の時間割を組んでいる[2]。（ただし各授業とも2校時連続（95分）で行なわれる）〈第1表〉

Ⅰ部は普通科のみであるが、Ⅱ・Ⅲ部は普通科とビジネス科に分かれ、それぞれの入学定員は、40人ずつで合計200人が各年度の新入生である。他に2年次以上に相当する編入生を初年度は80人、5年度は40人を定員として受け入れている[3]。

一方、広く一般社会人にも科目履修生（聴講生）を募集しており、5年度は257人が土曜特別講義（月2回）[4]や、平日の授業を本校生に混じって受けている。

2）二学期制を採用し、前期（4月―9月）・後期（10月―3月）にわけている。ただし、現行では、学期ごとの編入・単位認定は認めていない。

3）授業は週5日制で、月1回、土曜日に特別活動（L.H.R.など）を行なっている。なお、土曜日の土曜特別講義で単位修得する

第1表　学 校 の 形 態

	1校時	2校時		3校時	4校時		5校時	6校時		7校時	8校時		9校時	10校時
単位制	10：40～12：15		休憩	13：00～14：35		休憩	14：45～16：20		休憩	17：30～19：05		補食	19：25～21：00	
←単位制Ⅰ部優先履修時間→										←単位制Ⅲ部優先履修時間→				
←単位制Ⅱ部優先履修時間→														
									学年制	17：30～18：15	補食	18：35～19：20	19：25～20：10	20：15～21：00

と、卒業単位数に加算される。

4）卒業は、3年以上在籍し、80単位以上修得すると認められる[5]。編入生の場合は、前の高校での修得単位数を加算するが、本校で10単位以上の修得を義務づけている。

3年で卒業をめざす生徒はそれぞれの部の優先時間帯の授業を中心に1日平均6時間の授業をうけ、1年間で30単位程度を修得できるように時間割にも配慮されている。

5）教育課程は、必履修科目（普通科32単位、ビジネス科30単位）と、それ以外の選択科目に分かれ、50単位以上が個人の選択となるため多数の科目を開設している。〈第1図〉

必履修科目については、各科目とも同時に3～4講座をおいている。そして現代社会については、政治的、経済的、および文化的内容に重点をおいた3講座から1つを選択する方法をとっている。また、数学Ⅰや理科Ⅰに

単位制課程（例）

普通科

内は必履習科目

授業時間数	2	4	6	8	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30
1年次	体育	国語Ⅰ		現代社会		数学Ⅰ		理科Ⅰ		保健					
2年次	体育	家庭一般	芸術	選択科目 国語Ⅱ、国語表現、現代文、古典、世界史、日本史、地理、倫理、政治経済 数学Ⅱ、代数・幾何、基礎解析、微分・積分、確率・統計、物理、化学、生物、芸術 体育、英語Ⅰ、英語Ⅱ、英語ⅡB、英語ⅡC、総合英語、英語理解、英語表現											
3年次	体育	家庭一般	芸術												
4年次	外国事情、時事英語、LL演習、英語語法、国際理解 英文ワープロ										その他、特別活動（ホームルーム、クラブ活動など）があります。				

ビジネス科

授業時間数	2	4	6	8	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30
1年次	体育	国語Ⅰ		現代社会		数学Ⅰ		理科Ⅰ		保健					
2年次	体育	家庭一般	芸術	選択科目 国語Ⅱ、現代文、世界史、日本史、数学Ⅱ、物理、化学、生物、芸術、体育 英語Ⅰ、英語Ⅱ、英文ワープロ、流通経済、簿記、情報処理、総合実践、課題研究 マーケティング、コンピュータ・グラフィックス、経営、工業簿記、会計											
3年次	体育	家庭一般	芸術												
4年次	税務会計、文書処理、プログラミング、情報管理 簿記演習										その他、特別活動（ホームルーム、クラブ活動など）があります。				

第1図　履 修 科 目

ついては内容に難易の差をつけた講座に分けて、生徒の個性や進路に合わせて選べるように配慮している（平成4年度）。

6）学校生活についてはチューター（担任）が生徒20人に一人つき、科目選択から学校のすべての生活について、卒業までアドバイスすることになっている。また、修学ガイダンス専任の教諭や、生徒相談室もあり、随時相談できる体制をとっている。

7）ホームルームは基本的にはないが、毎月の第4土曜日をあて、ロングホームルームや学校行事などの時には、前記20人が一つの集団として行動している。クラブ活動や生徒会活動は、学年制とともに活動している。

Ⅲ．単位制課程での地理教育
――初年度の実践から

(1) 受講生の特質

1）受講生は年齢層に幅があり、おおむね15歳～20歳が中心であるが50歳を超える生徒も受講している。

2）過去に地理を習った経験のある生徒もいる（1年次で選択する生徒が多いが、前の学校で途中まで習っている場合もある）。

3）受講の動機に差があり、地理を積極的に選択したのは1～2割で、大半の生徒はモデルコースの時間割に従って受講している。

4）社会科の中で地理が一番好きだという生徒は2～3割（地理と現代社会〈経済分野〉の受講生のアンケートによる）で、歴史が好きだという生徒がの方が多い。

(2) 授業内容

1）前期は自然環境・地図の分野を中心に教科書と作業学習を並行して行った。写真集やビデオを使ってできるだけ眼でみて理解できるように心掛けた。その結果、地形の形態等の把握はよくできたが、気候分野でケッペンの気候記号の理解などが不十分であった。

また、夏休みに地域調査（一人1調査）を課した。このための事前準備のために2～3時間をあて、休みにはいる前にあらかじめテーマと地域を決定させた。

2）後期は人口と産業の分野の授業とともに、地域調査の発表を随時行った。

人口については、大阪府の市町村別（大阪市は区別）に、総数、増減および昼間人口率などの統計表を用いて市区町村別に階級区分図を作成した。そして学校のある都心部と、生徒の住んでいる地域との差異を調べた。

産業の分野では、農業を地域別に学習したのち、鉱工業にはいり、アメリカ、旧ソ連、中国、西ヨーロッパについて国ごとに、教科書の後半の地誌部分も見ながら進めた。ここでは地名を覚えることに閉口した生徒も多かった。

Ⅳ．初年度の授業をふりかえって

1）学年制課程のように、同じ内容の授業を複数クラスでくり返すことはなく、各時間ごとに教材の精選や内容についてのより十分な検討が必要であった。

2）初年度は受講生が少ないため、一人ひとりの実態が把握しやすいというメリットがあったが、理解度の差が歴然とし過ぎたため、かえって授業の進み具合が遅くなった。

3）授業内容については、系統地理的に進めてほしいという生徒と地誌的な方が良いという生徒にほぼ半々に分かれており複数講座

の開設の時には配慮する必要があった[6]。

4）作業をしたあとや、ビデオを見たあと、それに発表を聴いたあとには、簡単な感想（判ったことや不明確なことなど）を書いてもらうとそれぞれの生徒の理解度や疑問点が明らかになり有効であった。

5）地域調査については力作（海外で調べたものや録画・録音を交えたものなど[7]）があったが、一方で未提出のまま、夏休み以降欠席が目立つ生徒もあり、負担が大きかった。

6）今後の課題として、地域研究（大阪、学校周辺）や国際理解研究を他の教科・科目と連携して取り組めるようにする。また、日曜日や長期休暇を利用して巡検・見学会を行い、単位を加算できるようしたいとに考えている。

さらに初年度は、社会科特別講義（2単位）を開講して時事問題を取り上げたが、今後地理的分野での特別講義を開講して広く一般市民にも受講を呼びかけたい。

〔付記〕本報告は1992年度立命館地理学会大会シンポジウム「地理学は何を教えるべきか(1)——地理教育の現状と展望——」で報告した内容に加筆したものである。

注

1）同じ時期に滋賀県で県立大津青陵高校が開校し、近畿地方では2校になり、5年度開設分を含めると全国で40校を超える定時制の単位制課程をもった高校がある。

2）4年度はⅠ部（午後1時開始）とⅡ部（午後5時30分）のみで、それぞれ普通科とビジネス科に分かれていた。

3）編入生の入学条件は、かつて1年以上高校に在籍し、20単位以上を修得しており、その後、中途退学したものに限定している。なお5年度は200人を超える出願があり、5倍以上の競争率であった。

4）毎月第1、第3土曜日に開講し、体育科、英語科、ビジネス科のそれぞれ2～3講座が開設されている。

5）単位修得の要件として欠課時数が1単位につき8時間以内と規定している。

6）平成5年度は2講座開設し、標準講座と、受験にも対応できる講座に分けている。

7）中国・カナダへ交流使節団の一員として派遣され現地の都市交通の特色をまとめたもの（15歳女生徒）、羽曳野市の古墳の発掘について現地説明会の録音を交えて詳しくまとめたもの（50歳女生徒）、平野区の変遷を明治時代から現代までの地形図をもとに調べたもの（16歳男生徒）、福井県の朝倉氏の城館あとをくまなく歩きビデオに撮って紹介したもの（15歳男生徒）などが、力作であった。